

2023年8月20日 久宝教会 礼拝メッセージ

「命よりも大切なもの」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 13章 10-17節

先週の礼拝のメッセージは、「〇〇は忘れたころに」という題で、水谷先生がお話されましたが、「天災は忘れたころに来る」というのは、今から丁度100年前に起こった関東大震災を経験した寺田寅彦の言葉です。普段通りの日常生活が、いつまでも続くと思っていたのにもかかわらず、大地震などの自然災害に限らず、事故や病気、突然の別れなど、ある日突然そのような状況が一変してしまうことがある。一変させられてしまうことがある。だから、いつでも備えておく、忘れないようにしておくことが大切、というようなお話だったかと思います。

中世ヨーロッパの修道院で、修道士たちが「メント・モリ(死を忘れるな)」という言葉、いつも挨拶の言葉として口にしていたと、聞いたことがあります。私たちは誰もがいつか死ぬ存在であるということ。形あるものはいつか滅びること、日本の言葉で言えば「諸行は無常である」ということ。それは洋の東西を問わず、いつの時代でも、真実なのでしょう。だからこそ、命ある間に、悔いが無いように生きたい。本当に大切なものに目を注いでいたい。誰もがそう願うのではないかと思います。

「本当に大切なもの」……。やがて朽ちていく形あるものを、私たちはたくさん握りしめたり、背負ったり、担いだりにしていると思いますが、それらはいつか突然、奪い去られる時が来ます。そのことを覚えて、あらかじめ一つ一つを手放して行った時、私たちの手の中や、心の中に残る「本当に大切なもの」とは、一体何なのでしょう。琉球の言葉で、「命どう宝(ぬちどうたから)」という言葉がありますが、「命こそが宝。命こそが何よりも大切なものである」と言われる方もおられるかもしれません。しかし、「メント・モリ」の言葉ではありませんが、一人一人の命にすら、必ず終わりの時がやって来ます。では、そんな「命よりも大切なもの」は、あるのでしょうか。

私たち一人一人、この世界に生きとし生けるもの全ての命を、生かしめ、存在たらしめている大いなる存在、神に目を向ける宗教は、「命よりも大切なもの」について、古くから語り伝えて来たのだと思います。しかし、そこにいくら真理、真実があっても、それを語り伝えるのは、欠けを持ち、限界を持った人間たちですから、それぞれの時代や文化の影響を受けながら、間違ったことを伝えてしまうことも、し

ばしばありました。いや、むしろその方が多くあったのではないかとさえ思います。今回の聖書のお話も、そのようなお話でした。

今回の聖書のお話は、聖書協会共同訳には「安息日に腰の曲がった女性を癒やす」という小見出しが付けられています。イエス様の時代には週に一回の安息日をしっかり守って、その日には一切の仕事をしない、ということが厳密に求められていたようです。そもそも「安息日」は、モーセに律法を与えた神との契約の「しるし」(シンボル)とされ(出エジプト 31:13)、「安息日を守る」ということが、単に週に一回のお休みの日を守るというだけではなく、何百もある律法全体を守るということを象徴していました。ですから、安息日を守らないというのは、神が与えた律法をないがしろにしているということで、言語道断だと見なされていたわけです。そのような時代的、文化的背景の中で、このイエス様の行動がありました。

イエス様がある安息日に、会堂でお話をされていると、そこに 18 年間も病の靈にとりつかれて腰が曲がったままの女性がいたので、イエス様がその女性に両手を置いたら、その女性の体はまっすぐになったというお話です。それで「めでたし、めでたし」で終わっても良さそうなお話ですが、このお話には続きがあります。同じ会堂内にいた会堂長が、「安息日に治療行為をするのはよくない。働くべき日は6日間あるではないか」と憤慨し、事の一部始終を眺めてた群衆たちを、「お前たちもイエスから手当してもらいたいなら、安息日ではなく、6日間の間に来るように」と制しました。しかし、イエス様はそんな会堂長に対して「偽善者たちよ、あなたがたは誰でも、安息日に牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか」(15)と言いました。「安息日を守る」と言いながら、家畜に水を飲ませることはしているではないか。ならば、この 18 年間も苦しんで来ていたこの女性を助けるのは、なおさらのことではないか、ということです。本当に大切なことは、安息日を守るという形の上のことではないのではないかと、もっと大切なものがあるではないか。イエス様は身をもって、そのことを伝えられたのだと思います。

そもそも安息日は、何のために定められたかと言うと、それは「安息日」という言葉の通りに「休む」ためです。申命記 5 章には、安息日には「あなたも、息子も娘も、男女の奴隷も、牛やろばなどのすべての家畜も、町の中にいるあなたの寄留者も、働いてはならない。そうすれば、男女の奴隷も、あなたと同じように休息できる」(14-15)とありますが、本来この掟は、奴隷や家畜たちを休みなく働かせ過ぎることがないように、一週間に一回は休日を与えなさいという主人、管理者に対

する命令でした。それが時代を経るにつれて意味合いが逆転してしまい、この掟を守れていない人を、律法違反だと言って差別して排除するように用いられるようになってしまっていました。その日の糧を得るために日雇い仕事をする貧しい人たちや、荒れ野で羊たちの世話をしていた貧しい羊飼いたちは、仕事柄、安息日を守ることが出来ませんので、律法違反だと言って差別されてしまっていました。そのような中で、イエス様は本当に大切なものは何か。その掟の心は何か、ということに改めて目を向けるようにと、訴えられたわけです。

さて、このお話の中で、イエス様と出会い、目を開かれたのは、「反対者たちは皆、恥じ入った」(16)と書かれている会堂長たちだけでしょうか。私は、この女性自身もまた、束縛から解放され、目を開かれた一人だったのではないかと思います。この女性は18年間、病の霊に取りつかれていたとありますが、この霊は元々のギリシャ語では「弱さの霊」とも訳すことができます。そして「腰が曲がっていた」と訳されている言葉は、「体全体が曲がっていた」です。「弱さの霊に取りつかれ、自分の身体を折り曲げずにはいられないほど、小さく小さくされていた」と考えてみると、このお話からはまた違ったものが見えて来るのではないかと思います。

また、この女性は「18年もの間、サタンに縛られていた」(16)とも記されていますが、ここで「サタン」と呼ばれているのは、「病の霊」「弱さの霊」のことでしょうか。ヘブライ語の「サタン」は「悪魔」と訳されることが多いですが、ギリシャ語の「悪魔(ディアボロス)」は、「分裂、分断を投げ入れる者」という言葉(ディア・バロー)を語源として持つ言葉です。安息日を守れる人と守れない人を分け隔てする。牛やろばなど自分の家畜と、霊に取りつかれている人とを区別する。そのように人々を右と左、上と下に区別し、差別する存在、それこそが悪魔、サタンの仕業であり、このお話の中では、会堂長ら反対者たちのことを指していると考えることが出来ます。また18年間もの長きに亘って、ずっと小さく縮こまされており、身体を伸ばせずにいたこの女性もまた、周囲からの差別や偏見の下、自分自身のことを弱い者、力のない存在として、諦め、見下し、弱さの霊に取りつかれたままになっていたのではないのでしょうか。そんな彼女の姿を見て、イエス様は彼女に「さあ、あなたの弱さから解放されなさい」(12)と両手を置いて呼びかけられました。それは「あなたはその弱さから解放されることが出来る、身体を伸ばして立ち上がることが出来るはずだから、私と一緒にやってみましょう」という呼びかけの言葉だったのだらうと思います。

安息日を守る、律法を守る、という正しいことをしているつもりが、いつの間にか律法の本来の目的を忘れ、神様の御心を忘れ、サタンに取りつかれ、他人を裁き、差別したり、また自分自身を弱く小さくしてしまったりすることがある……。それは2000年前のイエス様の時代だけに限らず、現代においても同じです。先日8月15日は、78回目の敗戦、終戦の日でしたが、第二次世界大戦の最中には、日本の教会も、世界の教会と同じく、戦争に反対するどころか、戦争に協力して来たという歴史があります。戦後20年以上を過ぎた1967年に「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」が、当時の教団総会議長（鈴木正久）の名前で公表されています。その中で「戦争遂行のために国策として諸宗教団体に協力が要請されたために、教団の名においてあの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めて来てしまった」、本来ならば「あの戦争に同調すべきではなかった。国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断をなすべきだった」「心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主に赦しを願うと共に、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞に心からの赦しを請う次第です」というような内容の告白がなされています。今から約半世紀前に出されたこの告白を、今の私たちも自分事として受け止めなければ、再び同じ過ちを繰り返してしまいかねない状況になって来ていると感じています。

「命よりも大切なものがある」。それは「祖国を守ることだ、誇りを守ることだ、神の教え、律法を守ることだ」……。そのような勇ましい掛け声の果てにあるのは、裁き合い、傷つけ合い、命を奪い合い、互いに退くに退けなくなってしまう膠着した争いでしかありません。今もなおロシアとウクライナの戦争は続けられています。一旦、戦争が始まってしまうと、報復のし合い、憎しみの連鎖に陥ってしまいます。だからこそ、戦争は決して起こしてはいけない、ということなのでしょう。

「真実を告げる」と言っている教会も間違っていることがあります。会堂長、宗教家、教師と呼ばれる人も、他人を差別し、抑圧する者になってしまうこともあります。また自分自身でさえ、自分のことを弱く小さくしてしまうこともあります……。しかし、それらはすべての命を創られた神様の御心ではありません。すべての命が解放されて、まっすぐに身体を伸ばして生きること。そのことこそが神様の御心なのだと思います。「本当に大切なものとは何か」「命よりも大切なものはあるのか」……。私たちはそれぞれに、これからも、この間に応答しながら、歩みを続けて参ります。